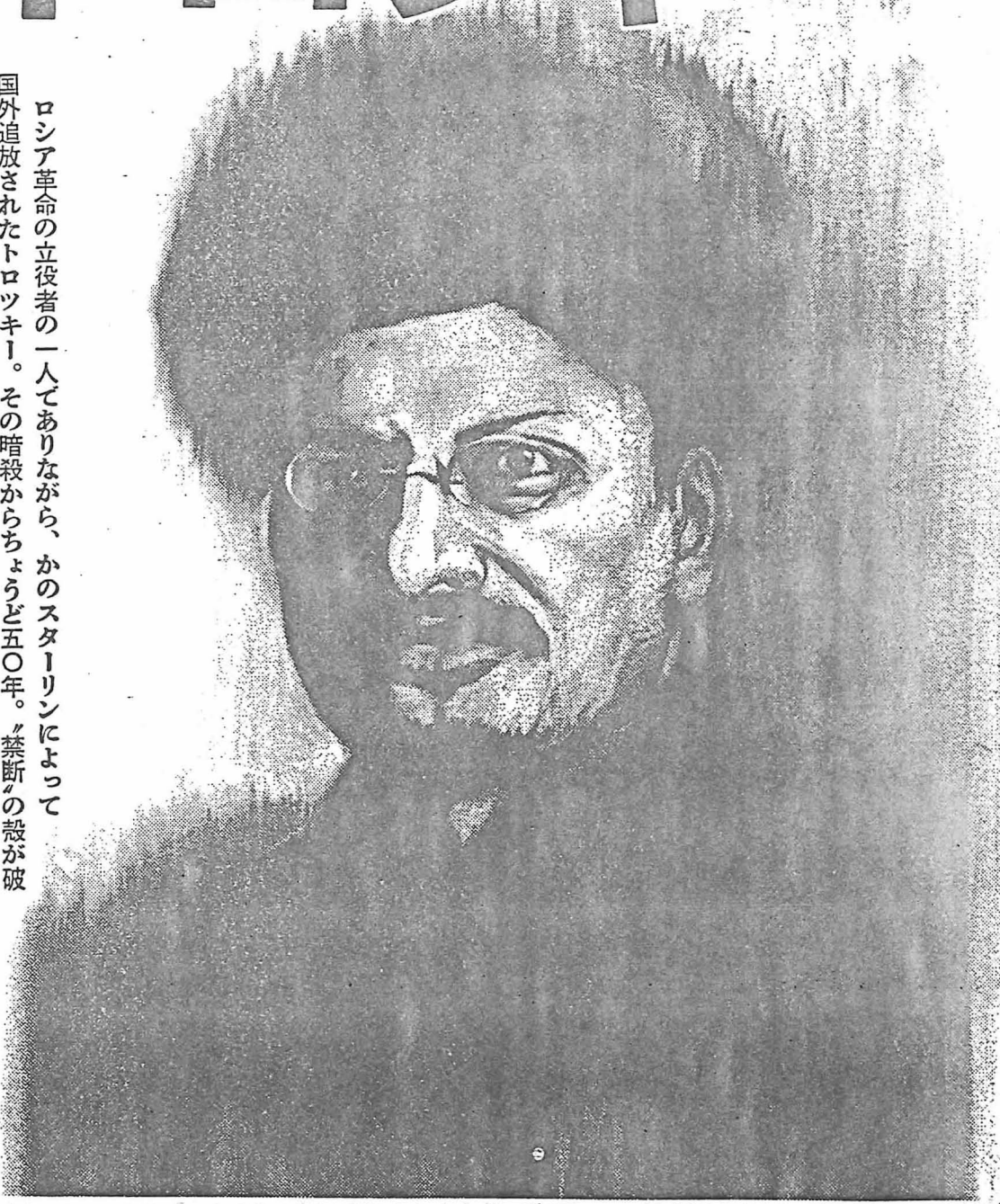


# 「冷凍庫」からよみがえる トロツキー

ロシア革命の立役者の一人でありながら、かのスターリンによって国外追放されたトロツキー。その暗殺からちょうど五〇年。「禁断」の殻が破れ、その思想の見直しが始まった。なぜ、いまトロツキーなのか。(編集部)



イラスト・木脇哲治

藤井 一行 ● 富山大学教授(ロシア思想史)  
塩川 喜信 ● 東京大学助手(農業経済学)  
志田 昇 ● 法政大学講師(美学)  
橋爪 大三郎 ● 東京工業大学助教授(社会学)

いまでも工業製品がつくれるかもしれないが、作家はいやな注文に応じた『注文生産』はできない。読者は、作家が自由にこれる粘土ではない」というような指摘をしている。つまり、洗脳の論理や、党や国家による検閲の合理化に対して、トロツキーは文学と芸術の最大限の自由を要求したんです。

また、トロツキーは市場経済を否定したというふうにいわれているが、全く間違った見方だと私は思っています。むしろ市場経済を擁護したのはトロツキーで、市場経済を利用することを通して社会主義に移行していく政策を説いた。

ロシア・マルクス主義帝国が滅んでいくときに、その神話が暴かれて、トロツキーの本物の姿が復権してくる。これは当然のことなんだろうなと思ったりもしています。

塩川 先ほど志田さんがいわれたトロツキーの市場経済の評価については、私もそう思います。会社の名前は忘れてしまいましたが、トロツキーは「アメリカの大砲をつくる会社よりも、フォードのトラクターのほうがはるかに日常的にはソ連にとって脅威である」とつまり西側の生産力にソ連が少しも追いつくような努力をしなれば、ロシアのおくれた生産力では社会主義どころではないと、非常にはっきりいっています。

逆にいうと、部分的な市場経済の要素を残して世界経済と結びついていかないと、ソ連は社会主義建設どころではなくて、経済建設すら非常にあやうい、といった認識をかなり強烈に持っていたと思います。

藤井 とかくマルクス主義者は自国の運命を考える場合に、

## 波乱の生涯

レーニンとともにロシア革命を指導したトロツキー。その思想の柱は「永久革命論」で、後進国ソ連は先進国革命との結合なしに、社会主義建設はできないとする論を展開した。本名はレフ・ブロンシテイン。学生時代にマルクス主義思想に触れ、革命運動に参加。逮捕、流刑、逃亡を繰り返す。第一次世界大戦中は、戦争反対を主張し、レーニンの立場とは一線を画したが、ロシア革命ではレーニン率いるボリスエビキ(多数派)に合流、革命政府の要職に就いた。

その後、レーニンが病に倒れ、激しい権力闘争の末、スターリンが共産党の初代書記長に就任。「永久革命論」に立つトロツキーは、「一国社会主義」路線をとるスターリンと対立、ついには国外追放され、亡命の地メキシコで暗殺された。

国外追放以来、トロツキーの思想は「反革命」の烙印を押され、著書も発禁処分を受けていたが、ベレストロイカ(改革)を掲げたゴルバチョフ政権下で発禁は徐々に解かれている。

## 神話暴かれ、真の姿が復権

橋爪 歴史の中でトロツキーという人間に与えられた役割やイメージは、トロツキーの実像と離れて一人歩きをしている。

スターリンはロシアという枠内、国家という枠内に共産主義の運動を閉じ込めてきました。それに対して、トロツキーはどこかで世界性というものを常に見ていた。

近年、スターリン、ロシア型

藤井 いまの社会主義体制というものを擬似社会主義だ、えせ社会主義だと、私はかなり前から思っていました。そういう体制がどうして出てきたのかを追究していく中でトロツキーに遭遇したんです。えせ社会主義を阻止するために、本来の社会主義のいくべき方向はこちらなんだということを提起していたがゆえに、スターリンによって倒された人物としてのトロツキーに出会ったのが一〇年ほど前です。それまでは一般的な伝説にとらわれていました。

塩川 いまソ連は非常に深刻な政治的、経済的危機にありま



「この前、東ヨーロッパを歩いている人々に会って、「これは本当の社会主義ではない。ちゃんとした社会主義をつくるためにがんばらなきゃならないんだし、トロツキーはそう主張していた人なんだ」といっても全然相手にされないですね。トロツキーもレーニンも同じようにだめだ、というあしらいをインテリゲンチヤからさえされま

それから、党が正しいという権威。さらに軍、実力です。この三つが共産党の三本柱とすれば、これによってロシアも、中国も北朝鮮もみんな支えられてくる。しかしその神話が崩れ、軍が重荷になり、党の権威がゆ

らいでくるならば、この体制はいずれ終焉の時を迎えざるを得なかった。これがまさに今だと思えます。そこで、再びトロツキーが見ていた国際性を党の中に持ち込もうという動きがあるのです

が、大変難しいのは、これを党がみずからやらなければならぬ。いわば自分の足を、自分の権威を、解除していく作業です。これほど党を誤らせ、経済をだめにしたのはだれが悪かった

のか。とりあえずスターリンが悪かったといえ、トロツキーを復讐させることになる。しかしレーニンも悪かった、毛沢東も悪かったということになると、もはや共産党である必要がない。そこまで民衆は考え始め

ます。トロツキーがこの現状を打開し得るモデルにはなり得ませんよ。塩川 いまのソ連・東欧の民衆の意識は、レーニン、トロツキー、スターリンという区別なしに、社会主義思想というものに対する否定的感情が非常に強いという状況になっているのではないかと思います。民衆の間には、あれが社会主義だという現実が数十年の重みでのしかかっている。別の社会主義があるのだといっても、説得力を持つかどうか。

自国の諸条件を主要な要件として見る傾向があるように思えます。発想法としても。だけど実際に、世界市場というものが形成され始めた時点で特にそうだと思いますが、一国の運命が一国だけでどうにかなるという時代は、現実としてもないわけでしょう。そこからトロツキーの「世界革命」の考え方も出てくるし、歴史論としての結合発展の考え方もそうなんです。常に大きな視野の中で、自分の足元にだけ目を奪われなくて、そこに影響を及ぼすものもろのフアクターを視野の中に可能な限り取り入れながら、自分とところの問題を解決しようとした、そういう政治家であり戦略家であり理論家であったのではないか。

識人たちが、マルクス主義の中に一つの理想を見て運動を展開していった。しかし現実問題として、革命はロシアで起こった。国単位で起こらざるを得なかったという制約がありました。スターリン、トロツキーが出てくるかどうかかわらず、非常に大きな分裂の種がここにあったのではないのでしょうか。塩川 別にトロツキーとかスターリンとかレーニンといった個人名の問題としてではなくて、あらゆる運動には、進んだ社会から流れてくる先進的なイデオロギーとか価値規範と土着のものとの相克、融合があった、ロシアの場合にもそれは非

志田 ロシア一国に革命が封じ込められないで、ヨーロッパのいくつかの国でかなりソ連と協力的な政権が出てきているような状態になっていけば、むしろトロツキーの国際性がプラスに作用したと思えますが、世界じゅうから干渉軍が攻めてきて、一国に封じ込められて、対抗するイデオロギーが民族主義で支えていこうとするようになっていく中では、やはりトロツキーが一番やりにくいような状態だったと感じました。藤井 トロツキーはおくられて出発した後発資本主義国が先進諸国に先んじて革命を達成した場合の、処方箋みたいなものを書いていきます。資本主義的な諸制度を取り入れて、まず生産力を高めて、できればヨーロッパの国際革命の勝利のもとでの西

側からの援助の上に立って発展させていく。そうせざるを得ないんだということを彼は説いていたのですが、それがあっさり無視されていってしまう。社会主義権力をとったからは、意識的に工業化を進め、集団化を進めれば、一〇年後、二〇年後にはすばらしい社会主義が出来上がるんだというスターリン派の夢が、いとも簡単に人民をとらえてしまった。その帰結が、惨憺たる現状になっているわけです。これからのソビエト社会、東欧社会、中国も含めて、建て直していくためには、原点に戻って、後発資本主義国が社会主義へと転化するためにはどうしな

ければならないのか、やはりトロツキーに学ぶ必要がある。そこにソ連、東欧についてのトロツキーの現代的な意義づけがある。また資本主義国で、社会主義運動をめざしている人たちにとつても、学ぶべき点の一つはそこにあるだろうと思います。橋爪 一国で社会主義を展開すると、まず国際的な資本の移動から切り離される。情報も入ってこないし、貿易の利益も受けられない。戦後の日本が享受したような国際貿易、国際分業の利益を受けることもできない。トロツキーはそういう悪条件を緩和しようとして、一時のぎのカンフル注射として非常にいい提案をするけれども、それではしょせん全体をカバーできないんです。社会主義は再配分ですから、こちらのものをあちらに持っていくということができるだけなんです。これでは全体としてジリ貧を打開することはできない。



私は国内でトロツキーに関する公開講演を各地でやるようになりましたが、八八年暮れには、アメリカのスタンフォード大学の研究所の史料館で三日間



資料に接し、感心した最大のことは、トロツキーという人は弁証法の巨匠であるということです。マルクスからトロツキーが継承したのは、なによりも革命的な方法論でした。弁証法的

# 名誉回復は始まったばかり

●ヒングラード教育大教授 V・スタルツェラ



Vitaliy Staritsay 一九三一年、レニングラード生まれ。歴史学博士。ソ連共産党中央委員会の党史概説編集委員会メンバー。

私の青年時代のトロツキー観は、他のソビエトの若者とまったく同じように、「社会主義の最悪の敵」というものでした。しかしながら、後に歴史家となり、革命を研究するなかで、一九一七年に関する資料にあたるうちに、トロツキーに対する、国家、政府が行った断罪というものは不当なものであると考えるに至ったのです。

一九八六年一月から二月にかけての、グラスノスチ(情報公開)が開始された初期に、やっと、ブハーリン、カIMER、メネフ、ジノビエフ、それに並んでトロツキーの名誉回復を求める動きが出てきました。

私は国内でトロツキーに関する公開講演を各地でやるようになりましたが、八八年暮れには、アメリカのスタンフォード大学の研究所の史料館で三日間

すごし、存分にトロツキーの著作に浸る機会に恵まれました。さまざまなものを読んだけれど、前に初めて読んだ『わが生涯』や『ロシア革命史』にも勝る感動を受けた。さらに印象を深めたのは、黄ばんだアマチュアが撮った写真でした。六×六で過ごした様子を写したものが、彼の小さなものだが、彼の実際の人生や家族との生活が写されており、とくにプリンキポ島で過ごした様子を写したものが、非常に感動しました。そのときから私はトロツキーを、単なる革命家としてだけでなく、一人の人間として身近に感じるようになりました。

その後は、新しいソ連共産党史の編集委員会のメンバーに選出され、ソ連共産党中央委員会所属の中央史料館のすべての文章、資料にあたる権限が与えられたのです。そこにはトロツキー資料部があり約六〇〇件の膨大な資料がありました。彼の生活、仕事に関するすべての資料、二一年から二八年に至るまでの著作を含む圧倒的多数の資料は、アムステルダムでもボストンでもなく、モスクワにあるということが判明したのです。そのことはだれも知らなかった。四カ月間、私はこの資料に没頭しておかげで、当時、国と党のナンバー2であったこの人物の大きな役割をとらえることができました。

## 年譜○トロツキーとソ連

- 1879 南ウクライナのクリミア半島で、ユダヤ人農場主の次男として生まれる
- 1896 オデッサ大学で数学などを学ぶが、中退
- 1897 「南部ロシア労働者同盟」を結成、地下活動に入る
- 1899 ロシア社会民主労働党(共産党の前身)創立
- 1903 党機関紙『イスクラ』の編集部問題でレーニンと対立
- 1905 ペテルブルグ・ソビエト議長に就任、その直後に逮捕、シベリアへの流刑処分をうけたが、逃亡、国外へ
- 1906 『総括と展望』を書き、永久革命論を展開
- 1914 第一次世界大戦勃発
- 1917 ロシア革命。この直前に帰国、レーニン率いるボリシェビキ(多数派)に加わり、革命後、外務人民委員(外相)に就任
- 1922 スターリン、共産党の初代書記長に就任
- 1924 レーニン死去。スターリンとの対立がますます深まる
- 1929 国外追放され、トルコ、フランス、ノルウェーを経て、37年にメキシコへ。この間、ソ連社会を分析、スターリン体制を批判した『裏切られた革命』などを発表
- 1938 国際共産主義運動の組織であるコミンテルン(第三インター)に對抗し、パリで第四インターナショナルを結成
- 1940 メキシコ・コヨアカンの自宅書斎で、8月20日、雇ったばかりの秘書、にピッケルで頭を一撃され、翌日、死亡

とあります。そのことがいまだのくらしい有効性を持つかを考えるると、ご承知のように環境問題とか資源問題とかが、未だ来社会のビジョン、欲望に応じ

すが、しかしソビエトが市場システムを導入して、うまく資本主義になるとは思えない。いま夢である資本主義が、現実にならば、そこで初めて社会主義とは何だったか、資本主義とは何であるか、ロシアとは何であるかという反省が、一〇年くらいたつて起こってくる。そのときにもう一回、トロツキーを読み返す知識人が出てきてほしいと思いますね。

した。いまの体制が悪い、もっと別の社会主義というものがあ

に囲まれて生きていくけれども、これが人類にとって決して理想ではない。いろんな問題点もある。こういうこともやがてわれわれは克服しなければなら

て、必要に応じて」という理想が許されない飽和点に近づきつつあるという感じがします。たとえば日本の場合だったら、失業率を出さないでいかにして成長率を低くできるかというように、市場価値を持たない産出物をどれぐらい経済システムの中に重要

す、必要に応じて」という理想が許されない飽和点に近づきつつあるという感じがします。たとえば日本の場合だったら、失業率を出さないでいかにして成長率を低くできるかというように、市場価値を持たない産出物をどれぐらい経済システムの中に重要

す、必要に応じて」という理想が許されない飽和点に近づきつつあるという感じがします。たとえば日本の場合だったら、失業率を出さないでいかにして成長率を低くできるかというように、市場価値を持たない産出物をどれぐらい経済システムの中に重要